第2回藤山中学校区地域協議会会議録

１　開催の日時及び場所
令和８年１０月１日（火）１８：３０～２０：１５
藤山ふれあいセンター　２階　大ホール

２　傍聴者
なし

３　出席者
出席委員　　１４名（欠席委員1名）
事務局職員　１１名

４　次　第
（１）　開会
（２）　議事
１　施設一体型小中一貫校の基本コンセプト(案)について
２　通学支援等に係わるアンケート(案)について
（３）　その他

【施設一体型小中一貫校の基本コンセプト(案)について】

（事務局）：（資料１と３に基づきコンセプト(案)について説明）

（会　長）：コンセプト(案)につきましては、少しでも多くのご意見をいただき、まとめていきたいと思いますので、委員全員にお一人ずつご意見を伺いたいと思います。

（委　員）：資料は、今まで私たちが話し合ったことや保護者アンケート結果もよくまとめてあり、非常にわかりやすかったです。その上でのコンセプト案ですが、これまでの小学校６年間、中学校３年間ではなく、９年間でみんなで育てていくということが表れており、それが、子どもたちにとって有益なのだと感じました。みらい学園のところに今後、学校の名称が入ってくると思いますが、歴史があるからと今までの地域名にこだわらず、子どもたちが、行きたくなるような名前になると良いと思いました。また、地域の拠点となり、地域を盛り上げてくれることを期待しています。

（委　員）：案の中の「育つ」の意味するところの例として「放課後も学べる環境、大人の学びの場」とありましたが、私は子どもも地域の大人も放課後に気軽に立ち寄って一緒に学べる場ができると良いと思います。大人が学び続ける姿を子どもが見ることで、堅苦しい「キャリア教育」ではなく、自然に将来や学び方を考えるきっかけになります。また、大人も子どもも集まることで子ど

もが普段見ない親の一面に触れたり、親が知らない子どもの姿が見えたり、お互いの理解が深まる新しいステージが生まれるはずです。

（委　員）：新しい学校をつくる際には、様々な教育課題が持ち込まれ、いつの間にか「てんこ盛り」になってしまうことが私の経験上よくあります。どの課題にも重要度や優先順位の差があるはずですが、あれもこれもと盛り込みすぎると、教職員にとって「行きたくない学校」になってしまうのではないかと懸念しています。そうした点への配慮が必要です。

また、コンセプト案の「みんなで育つ学び舎」についてですが、ここでいう「みんな」は子ども、教職員、保護者、地域が同列に並んでいますが、基本は小中学生がどのように育つかが最優先ではないでしょうか。教職員が育つことや地域の大人が生きがいを見いだすことは望ましい結果ですが、それらをコンセプトの同列項目にするのは再検討の余地があると思います。経営面から見ても、目的の整理が必要です。

「９年を見通した」小中一貫教育を掲げるなら、今後の検討課題はむしろ、９年間を通したどのようなシステムやカリキュラムを構築するかにこそあるべきです。そして、その９年間で何を実践すれば子どもがどう伸びるのかを、最も重要な柱として据えるべきだと考えます。

最後に、子ども食堂や健康遊具など魅力的な取り組みが増えるのは歓迎ですが、あれこれ詰め込みすぎると現場の負担が増え、本来の教育が手薄になりかねません。教職員が勤めたいと思える学校設計を優先する視点を忘れないで欲しいと思います。

（委　員）：コンセプトを決めるうえで最も大切にしたいのは、設立に関わった者として誇れる成果を残すことです。なので、自分の思いはしっかり伝えていきたいと考えています。今後、小中一貫校になることで鵜の島地域から小学校がなくなると、現在鵜ノ島小学校を拠点に活動している団体は新しい学校が遠くなり支援に行きづらくなるのではないかと懸念しています。それはとても寂しいことです。そこで、新校ができる前に、移動を補助する仕組みや鵜ノ島校舎跡地での行事開催など、新しい学校に偏らず、藤山中学校区全体が盛り上がるための仕組みを作っておきたいと思います。

また、校舎跡地が何も決まらないまま放置され荒れてしまうのは避けたいです。鵜ノ島小学校、藤山小学校跡地の今後の活用方法を早めに検討・決定し、「お父さん、お母さんが通った学校だよ」と子どもたちに誇って伝えられる形で残していければと思います。

（委　員）：コンセプト「みんなで育つ９年間の学び舎」について、この主語は誰なのかとまず思います。例えば、地域とか全部だったら「地域、保護者、教員で育む９年間」となるのか。コンセプトが、地域も教員も育てようというものであり、みんなが育っていくものと位置づけるのなら、提案の通りになるのかと思います。

しかし、小中一貫校のコンセプトである以上、基本的には子どもを主語に据

えるのが適切だと考えますが、「教員や地域も育てる」という狙いがあるなら、その意図を明示するべきです。
また､例に挙がっている異学年活動は非常に有効だと感じています｡異学年活動を通して育まれる「思いやり・優しさ・努力・憧れ・感謝」といった非認知能力は、低学年のうちに伸ばすことで、その後の認知能力（学力）にも好影響を与えると考えます。したがって、異学年活動をカリキュラムの核に据え、小学１年生から中学３年生まで継続的に多くの機会を設けることで、他にはない特色ある学校になれるはずです。
中学生の視点では、異学年活動が自己有用感や自尊感情の向上、他者への優しさや自身の強みの認識、社会性の育成につながることが期待できます。藤山中で行われている縦割りの「ヤング自治会（課題解決学習）」の取り組みを小学校にも広げ、縦のつながりを伸ばしていくことで、非認知能力の伸長がさらに促進されるでしょう。
概ね素晴らしいコンセプトだと思いますが、ネーミングや「みんなで」という表現の照準（誰を対象にするか）を、明確に詰めていくことを提案します。

（委　員）：皆さんのご意見とは少し異なるかもしれませんが、私は社会教育行政の経験を持っているため、その視点から「子ども、教員、保護者、地域がともに育つ学校」という元々のコンセプトに共感しました。そもそも「学校の周りに地域がある」のか「地域の中に学校がある」のかという捉え方が重要で、私は、地域の一部としての学校、つまり「地域の学校」であるべきだと考えています。
その中心にあるキーワードは「生涯学習」です。教員はもちろん、保護者や地域の大人も学び続け、成長していく場であってほしい。ですから「学校を核とした地域づくり」を進められる学校になればいいと考えています。先ほど出た教員の負担という懸念に対しては、学校側だけが地域連携を引き受けて課題解決をするのではなく、まず個々人の「学びたい」「行きたい」という主体性を大切にすべきだと思います。
大人自身が行きたいと思える学校をつくり、その中で学校教育と社会教育が一緒にできる部分があれば、無理のない形で協働していく、そういう自然な融合が望ましいです。これから学校をつくっていく際には、「地域の中の学校」「地域のための学校」という認識を基本に据えていく必要があると考えています。

（委　員）：コンセプト案の内容は大変素晴らしいと思いました。ただ、私自身まだ学びが足りないため、今回のコンセプト案が具体的にどう使われるのか、なぜ必要なのかを十分に理解できていない部分があります。たとえば、学校名や校歌を決める際にこのコンセプト案が活用されるのか、といった具体的なイメージを抱きながら伺っていました。
全体としては、示していただいた例ややることが多く感じられ、すべてを現実にできるのか疑問に思う点もあります。各項目がどのような具体的活動に落と

し込まれるのかがまだ見えないため、その点がもっと明確になると理解しやすいです。小中一貫校にすることで他校にはない明確な強みが打ち出せるなら、地域の方にも胸を張って紹介できるのではないかと考えています。

（委　員）：率直に申し上げると、コンセプト案のような抽象的な議論は難しく、保護者アンケートにあるような具体的な不安や意見の方が話しやすいです。今回のように同じレベルで議論するのは負担が大きく、こうした会議に参加するのも初めてなので、1時間集中して聞き続けないと内容が分からない状況です。せっかく保護者の方も多く参加しているので、議題をもっと細かく分けて「この場面ではどうするか」といった具体的なケースごとに話し合えるとありがたいです。

（委　員）：コンセプト案についてですが、「異学年活動」がキーワードになるのは良いと思いました。私が当初から心配しているのは、小中一貫になることで小学校高学年のリーダー経験が減ってしまう点です。そうした経験は異学年活動で補えるのではないかと期待しているので、その観点をコンセプトに盛り込んでいただけると嬉しいです。

また、保護者アンケートには不安の声が寄せられており、多さは分かりませんがそうした不安に応える表現もほしいと感じます。どの段階でコンセプトが示されるかは分かりませんが、示される際には「安心・安全への配慮」など、保護者が安心できる具体的な言葉を入れていただけると、不安の軽減につながると思います。

（委　員）：「みんなで育つ」は主語が不明瞭で分かりにくく感じました。何が育つのか、誰が育つのかを明確にすると良いです。

また、サブタイトルに「小中一貫」とあるため、あえてコンセプト内で「9年間」を強調する必要はないのではと思いました。親の転勤等で9年間ずっと同じ学校に在籍するとは限らないため、9年間という言葉を、使わないほうが良いのではと思いました。

最後に、ワークショップで出た「つなぐ」というキーワードを入れると、柔らかく親しみやすい印象になるので、「育つ・つながる」などと、表現してみてはと思いました。

（委　員）：皆さんのご意見を伺って、まだ形がはっきりしておらず不安な点もあることはよく分かりました。一方で、皆さんが知恵を出し合って前向きに考えている姿勢も強く感じました。私は率直に期待しかありません。完成したら本当に楽しそうだし、夢が広がるとしか思えません。みんなで前向きに進んでいきたいという気持ちでいっぱいです。

ひとつ具体例を挙げます。今秋、鵜ノ島小の校長先生の呼びかけで「授業参観」や「給食試食会」に私が運営しているサロンの、８０代後半～９０代の方々が約１５名参加しました。多くの方は小学校に行ったのが約７５年前で、その後学校に足を運んでいませんでしたが、その行事にとてもワクワクしていました。その姿を見て、学校に行くことは何歳になっても楽しみになるのだと改めて感

じました。
誰でも来られて、子どもたちが声をかけて一緒に授業を受けたり、給食を一緒に食べたりできる。そういう場こそ本当の学校ではないでしょうか。普段は一人で昼食や夕食をとっているお年寄りにとって、こうした機会は大きな楽しみです。
ですので、小学生・中学生・教職員・保護者・地域の方々・お年寄りがみんな行ける「場」をつくっていただけたら、とても嬉しく心から期待しています。

（委　員）：地域の高齢者が学校で楽しい活動に参加出来たり、期待を寄せたりすることができるのは、小規模校である鵜ノ島小ならではだと思います。新しい学校は規模や距離の面で難しくなるため、その点は少し残念に感じます。
コンセプトについては、専門家が見ればさまざまな解釈が出るでしょうし、保護者から見れば保護者目線の受け取り方があると思います。最終的には見た人が「これは子どものことを言っている」と感じればそれでよく、地域の方が「地域のことを言っている」と受け取ればそれでも良い、と私は考えています。つまり、厳密にこだわる必要はないと思います。最終的な学校名の部分はこれから考えられるでしょう。
一つ気になるのが、例の中にある「STEAM教育」という言葉ですが、一般の方にはわかりにくいかもしれません。もし使うのであれば、「教科の枠を超えた学び」といった、よりわかりやすい表現に置き換えるのがよいと思います。
もう一点、AIの活用についてです。保護者アンケートに「AIの効果的な活用」とあるため入れてあるのかと思いますが、個人的には小学生段階でのAI活用には疑問があります。チャット形式で学びが進むこと自体は考える良いきっかけになる面もありますが、小学生が日常的にAIを使うことで思考力に悪影響が出ないか心配です。教師側の働き方改革の一環としてAIを活用することには賛成ですが、それをコンセプトとして打ち出すかどうかは慎重に検討したほうがよいと考えます。

（委　員）：私は保育士なので、幼児期の子どもについては、小学校の先生より理解がある面があり、保護者と関わる時間も多く取れていると感じています。しかし、小学校に上がると先生と保護者の関わりは急に減ってしまいます。
特別支援学級や支援員などで手厚いサポートを受けられる子もいますが、支援学級に入るほどではないけれど、授業に入りづらく、先生に気づいてもらえずに叱られてしまう子もいると思います。そうした子どもたちを理解できる先生が増えてほしいですし、保護者側にも必要な知識がもっと広まれば安心です。
また、保育現場で重視されている「子どもの主体性」を、学校の場でも大事にしてほしいと考えています。子どもが自分で考える力を育てられるよう、先生が上手に導いてくださると嬉しいです。

（会　長）：沢山のご意見出ましたので、事務局で意見のまとめと、質問に回答ができるようであれば回答をお願いしたいと思います。

（事務局）：まず、名称について、「みらい学園」という名称は決定ではありません。行き

たいと思える名称にしたいというご意見をいただいているため、改めて協議会で検討します。
次に、「みんなで育つ」の意味と主語についてですが、先ほども、大人が学ぶ姿を子どもに見せたいというご意見があったと思いますが、だからこその、「みんな」という言葉にすべて集約させたつもりでした。我々の思いとしては、「みんなで育つ」「一人一人が主体的に育つ」ことも想定しています。「みんなで育てる」だと、どうしても人に育ててもらうような意識になっていく。誰かを育てるんだという、これももちろん大事なのですが、まず自分自身が伸びたい、育ちたい、大きく成長したいという願いを持って、関わっていける場になると良いという思いです。
なので、学校である以上、まず小中学生が中心であることを前提に考えていますが、それに加えて、文部科学省が示す通り教職員自身の成長も重要視しています。さらに保護者や地域も含め、関係者が連携して学び合う場を目指しています。
次に、「９年間」と明記することについてはご意見をいただきました。「小中一貫校」という表現だけで十分ではないかとの指摘もあったため、協議会で再検討します。一方で、藤山の特色として小中が一体となり９年間を共に過ごすことを強調したいという考えもあります。もし協議会で「９年間」を外す方が良いという結論になれば、そちらに従います。
また、学年活動について多くのご意見をいただき、ありがとうございました。皆さんの期待が非常に大きいことを改めて感じています。「新しい学校の売りは何か」といったご意見もありましたが、私たちが特に重視したいのは学年活動です。これを実際に展開していければと考えています。
具体的には、縦割り班活動を拡充したいと考えています。小学校では6年間で行っている縦割り班活動に中学生が加われば、活動の期間が9年間に広がり、班の人数も増えます。こうした活動を継続的に行うためには担当教員を配置し、さらに地域の方にも担当者として参加していただければと考えています。例えばヤング自治会活動に組み入れれば、学校と地域がともに育っていくイメージが持てます。
コンセプトについて、「どう使うか」については、まずは地域の皆さんにしっかり伝える必要があると思います。そして、学校名や校歌を考える際にも重要な視点なので、反映したいと考えています。広く一般の方に見てもらい、先ほど副会長がおっしゃったように各自が解釈しながら「みんなで育てる学び舎」になればと思います。
高齢者の方が授業参観や試食会に参加できるというご意見をいただき、とても嬉しく感じています。地域活動が自然に集まり、高齢者の方々が生き生きとされることを期待しますが、鵜の島の方がこちらまで来られるかは課題です。よいアイデアがあればぜひこの場でご提案ください。
また、STEAM教育がわかりにくいという指摘もいただきましたので、説明の仕方

を検討します。

（会　長）：事務局に、まとめていただきましたが、コンセプトについては、今日の意見を踏まえて、時間をいただいて最終的に決めていくのが良いのではと思いますが、いかがでしょうか。また、このコンセプトを作って最終的に何に使うとか、公表等についての時期など案があれば、事務局からお願いします。

（事務局）　：コンセプトにつきましては、新しい学校施設をどのようにするかを考える前に、まずは、新しい学校の教育方針を決めることが必要ということで、協議いただいているところです。決まり次第、地域等にも公表していく方針ですし、今後、学校名や校歌等を決めていく際にも活用されるものと考えています。コンセプト案について、今日、様々なご意見をいただきましたので、このご意見を踏まえて教育委員会で修正し、次回、来月の協議会で決定したいと思います。また、コンセプトを具体的に、このように修正したらよいというご意見がありましたら、メール等で事務局にお寄せいただいたらと思います。

（会　長）：では、コンセプトについては、今日の意見を踏まえて、最終的に次回に決定をしていくという流れにしたいと思います。

他にご意見はありませんか。

（委　員）：１行目に「ウェルビーイングな学校を目指したコンセプト案」とありますが、ウェルビーイングという言葉は、誰にでもわかる言葉なのでしょうか。私のような高齢者も、沢山見られると思いますが、理解されるのでしょうか。

（事務局）：では、その言葉を使うのはやめて、「学校がめざすコンセプト案」にします。

【通学支援等に係わるアンケート(案)について】

（会　長）：次に議題２の通学支援等に関わるアンケート案に移りたいと思いますが、その前に、事務局に事前に確認したいことが２点あります。まず通学支援対策というのは、基本的にはアンケート結果を踏まえて、教育委員会が最終決定をするということよろしいですか。もう１点、このアンケートについて、関係するのは鵜ノ島小の保護者の方だと思いますが、こちらにおられる鵜の島の委員の方は、事前にこのような内容のアンケートをすることをご存じなのでしょうか。

（事務局）：はい。まず通学支援対策につきましては、アンケート結果等を考慮しながら最終的には、教育委員会で決定します。また、アンケートの内容につきましては、鵜の島の委員に事前に案を見ていただき、いただいたご意見を基に修正したものを今日お示ししています。

（会　長）：わかりました。では、通学支援等に係わるアンケート(案)について、事務局から説明をお願いします。

（事務局）：（資料２に基づき通学支援等に係わるアンケート(案)について説明）

（会　長）：　ただいま事務局の方から、アンケートの実施について説明がありましたが、ご意見、ご質問等はありますか。

（委　員）：基本的な考え方とあるのですが、こういうルールがいつごろ決まったのでしょうか。小学校の通学距離が４Km以内というのは、国において非常に古い時

代に決まったものです。それが、そのまま生きているのであれば、現状は違っているので、そのあたりを考慮して、アンケートの結果を分析してほしいと思いますが。

（事務局）：この通学距離の基準につきましては、適正配置の計画を策定する中で、審議会の委員さんに国の基準を参考としていただきながら、宇部市においてもこれを適用しようということで令和６年１１月に制定した、適正配置計画の中に、明記させていただいております。ただ、それが委員が言われたように、今の実態と合うのかというところもありまして、今回もこのアンケートを実施させていただくところですので、アンケート結果をしっかり分析していきたいと思います。

（委　員）：アンケートの③と⑥のその他の自由記載のところで、③は保護者送迎の例があり、⑥はありませんが、両方同じに揃えられませんか。

（事務局）：両方とも③と同じように、その他の例として保護者送迎を入れます。

（委　員）：書き方だけの話なのですが、③で通学方法の希望を聞いて、⑥でスクールバスを導入した場合も同じように聞くようになっていますが、同じことを聞かなくても、⑥はスクールバスを導入した場合は利用しますか、という問いにして「はい」か「いいえ」で答えるようにしたら良いのではないでしょうか。

（事務局）：ここについては、同じことを確認するようではありますが、あえて、スクールバスがあってもうちはやっぱりこうする、というところを知りたい意図がありますので、もしご了承いただければ、このままの標記で置かせていただけたらと思います。

（委　員）：はい。わかりました。

（会　長）：それでは、このアンケートについては、先ほどの箇所を微修正をしたうえで、進めてもらうということでよろしくお願いします。

【その他について】

（会　長）：委員の皆さんから、何かありますか。

（委　員）：視察の件ですが、今年度は難しいと思いますが自分たち協議会委員だけでなく、保護者の方たちを対象に先進校の視察を実施していただけたらと思います。イメージをしていただくには、視察をしていただくことが有効と思いますので、ぜひ、検討をお願いします。

（会　長）：保護者の不安というところで、いじめとか運動場の話とか出るのですが、これはまさに私たちが抱いていた不安と同じで、でも、埴生小中一貫校に視察に行き、校長先生はじめ関係者の方から、実際に経験された話を聞いて、私たちの不安が解消し、納得したと思います。なので、保護者の方に新しい学校を見ていただくのも良いですが、先進地の関係者の方の話を聞く会を作っていただけたら、保護者の方も納得されるのでは思いますので、よろしくお願いします。

（委　員）：通学のことですが、中学生の通学のルールはどのようになっているのでしょ

うか。昔から、中学生は徒歩か自転車なのではと思いますが、６年生まではスクールバスで行けて、中学生になったら急に乗れなくなるのはどうだろうかと。今から、そのあたりも考えていかないといけないのではと思っています。

（委　員）：私は、中学生もスクールバスを利用して良いのかなと思います。雨の日はバスで行こうとか、雪が降ったらバス行きたいとかいうところの、今後の対応も気になります。

また、今、この協議会の進捗状況がどのようになっているのか。計画的に前倒し出来ているのか、それとも遅れているのかが気になるのですが、コンセプトも大事だとは思いますが、そこばかりに軸足立てても仕方がないので、ある程度、皆さんの方向性が一緒ならば、ほかの課題などをどんどん進めていったほうが良いのではないかと思いました。

（事務局）：協議会の進捗状況としては、遅れてはおりません。むしろ、通学支援方法などは、来年度以降の開校準備委員会で協議する内容を前倒ししているというところです。コンセプトに関することも、来月の協議会で決定するということで、決して遅れている状況ではないと思っています。